

# R

KANSAI  
UNIVERSITY  
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

# Reed

No. 36

February, 2014

関西大学ニュースレター

発行日：2014年(平成26年)2月28日

発行：関西大学 広報室広報課

大阪府吹田市山手町3-3-35

〒564-8680 / TEL.06-6368-1121

<http://www.kansai-u.ac.jp/>

◎和食 自然と共にある暮らしが育てた文化

## 日本の食文化の特質を探究

## いかに次世代につなぐか

大学の知と食の現場の連携は拡大・深化する

■対談

辻 雅光

京料理 二軒茶屋中村楼 主人 × 楠見 晴重 学長

### ■トピックス [学内情報] —11

第22回オリンピック冬季競技大会

ソチ五輪・フィギュアスケート男子シングルで  
町田樹さんが5位、高橋大輔さんが6位に入賞！

文部科学省ミュージアム「情報ひろば」で、企画展示を開催  
古代エジプトの文化財の修復と研究

2014年4月、大学院人間健康研究科を開設  
健康運動や体育スポーツの指導者、  
地域福祉の実践者を育成

### ■社会貢献・連携事業／地域連携 —13

関西大学・八幡市・URが連携協定を締結

男山団地再生に向け、学生が運営  
コミュニティ活動拠点「だんだんテラス」を開設

オーストラリア政府派遣短期日本語・日本文化研修プログラム  
オーストラリアの日本語教師らが日本文化を体験

大学受験を希望する被災地高校生を関大生がサポート  
関西大学の研究センターSTEPが  
岩手県立大槌高校への遠隔学習支援を開始

### ■関大ニュース —15

文化会速記部が全日本大学速記競技大会で50連覇を達成 ほか

### ■リーダーズ・ナウ —5

在學生—社会学部3年次生 前田 奈美 さん

卒業生—清水寺僧侶 大西 英玄 さん

### ■研究最前線

コミュニケーションメディアの研究

新しいコミュニケーション表現システム —7

総合情報学部 —米澤 朋子 准教授

### アメリカ近代建築の研究

R. シンドラーの建築思想と空間構成 —9

環境都市工学部 建築学科 —宋 烈 伸吾 教授



辻雅光  
京料理 二軒茶屋中村楼 主人

楠見晴重  
学長

# 和食自然と共にある暮らしが育てた文化 日本の食文化の特質を探究 いかに次世代につなぐか

## 大学の知と食の現場の連携は拡大・深化する

「和食 日本人の伝統的食文化」がユネスコの無形文化遺産に登録されることが決定した。日本人の栄養バランスに優れた食生活、自然の美しさや季節の移ろいを繊細に表現する料理に対する関心はさらに高まるだろう。しかし、一方で家庭の食卓では和食離れが進んでいるという現状もある。和食という守るべき日本文化を、いかに次の世代につなぎ、新たな発展を実現するか、大学として寄与できることは何か。楠見晴重学長と、京都市東山区で400年以上続く京料理の老舗「二軒茶屋中村楼」の12代目主人・辻雅光氏がそれぞれの立場から意見を交わした。



二軒茶屋中村楼  
名物「豆腐田楽」

### ◆四季を大切に、絆を深める日本の食文化

楠見 和食がユネスコの無形文化遺産に登録され、日本の伝統的な食文化について国内、国外から注目が集まっています。京料理はやはり和食を代表するものだと思います。今日はその京料理の老舗料亭である中村楼のご主人にお話を伺えるということで本当に楽しみにしてまいりました。まず、中村楼の歴史などを少し教えていただけますか？



辻 中村楼の前にある石畳の道が、祇園祭やおけら詣りで有名な八坂神社の参道になります。この道を挟んで、東に中村楼、西にもう1軒の茶店が参拝者に香煎茶や食べ物を提供し、二軒茶屋と呼ばれていました。応仁の乱で焼失した八坂法観寺が再建したことを記した文書に「二軒茶屋」の記述があります。これが中村楼に関する最も古い記録で、約480年前になります。江戸末期ぐらいからは簡単な食べ物とどぶろくのようなお酒を扱うようになり、明治期に入ると茶屋とは別に本格的な建物を建て「中村楼」としました。

楠見 日本の食文化の現状をどのようにお考えですか？

辻 まず文化遺産に決まったということに対して、日本人としての誇りと喜びはありますが、それ以上に今にしっかりしておかなければ、日本の食文化が失われてしまうという思いが強くなります。

お正月はお雑煮。7日になったら七草粥。15日になったら、残った鏡餅を一口サイズに切って焼いたものを小豆粥に入れて食べるというように、季節や年中行事と密接に関わりながら食事をする中で、家族や地域の絆を深める社会的慣習が日本にはあります。しかも、列島の北から南まで気候風土、採れる野菜や魚も違う、それぞれの土地ごとに四季折々の季節を重んじた独特の食の伝統があります。その食の伝統的慣習の意義を若い人達にも知ってもらわなければならないと思っています。

和食とは、料理屋の料理だけを意味するものではありません。一汁三菜にご飯といった家庭料理が和食の基本。例えば、ご飯に味噌汁、焼き魚、煮物、お漬物です。料亭のように高価な器に手の込んだ料理を飾らなくても、器(食器)をちょっと変えて、バランスよく盛るだけでごちそうになります。カップラーメンやレトルト食品は確かに便利ですが、ちょっとしたことでいいから手をかけて、調理法、器の使い方、四季折々の変化を毎日の食卓に取り入れていただきたい。

そして、煮炊きするには、うまみ成分を含むカツオと昆布の出汁をぜひとも使ってほしい。人工の味が舌が麻痺して本当の味が分からなくならないように、出汁のうまさも今こそちゃんと伝えなければならないと考えています。

### ◆京料理とお酒がうまい理由は水にあった

楠見 素材、器、盛り付け……、すべてが一つになってストーリーを作り上げる和食の美的感覚は非常に奥が深いと思います。和食と水の関わりはどのようなのでしょうか？

辻 水が一番大きな要素です。水が悪ければ、煮炊き、出汁はもちろん、刺身のような生ものを食べることもできません。水が良いから、しっかりと処理もできて、生で安心して召し上がっていただけるのです。

楠見 実は、私は京都の地下水の研究を30年近くしております。古来より、世界的に都は大きな川のそばに造られましたが、京都には大きな川がありません。大きな川のない立地で、なおかつ1200年も続いた都は世界的にもほとんど例がないと言って良いでしょう。それだけ続いた理由はいろいろありますが、私は京都の地下水が大きな役割を果たしてきたと考えています。

現在の京都には、平安時代から江戸時代に掘られた井戸の遺跡がたくさん残っています。昔ですから、それほど深くなくて、2メートルほど掘れば良い水が出たのでしょうか。良質な水を比較的容易に確保できることは、都として永らえる一つの要因であると考えられます。現在では、その水を料理だけでなく染め物などいろいろなことに使って、京都の文化が発達したのではないかと思います。

辻 そうですね。中村楼でも私が子供のころはたくさんのお水が出て、井戸水を飲み水にも調理にも使っていました。井戸水は祇園祭の神輿を担がれる方々の飲み水、神輿の木枠を組み時にかける水に使ったりもしました。昔は二軒茶屋の水が「力水」と呼ばれて世間に親しまれていました。

楠見 京都・伏見のお酒も全部地下水で造られています。京都の地下水は少しミネラルが入った中硬水ですが、鉄、マンガンが含まれていないので伏見のお酒はまろやかな味に仕上がります。

一方、兵庫県の灘は江戸時代に「宮水」が出て、おいしいお酒ができるということで発展しました。灘のお酒はどこで消費されたかという、江戸です。宮水は六甲山の花崗岩を通り抜けたミネラル分の豊富な硬水です。この水を使う灘のお酒は少し辛口になります。それが、江戸の濃口の料理にぴったりだったのです。

辻 そうだったのですね。京都の水は調理するにあたってベースとなる出汁が出やすかったから、京料理では調味料もあまり入れないで済んだ。お酒は、同じ地下水を使う伏見のお酒と良く合った。江戸は同じ出汁をとっても出にくいから、調味料を少し多めに入れる。それで天ぷらやうなぎなどの単品料理、あるいは握りずしが発達し、その濃い味には灘のお酒が合ったということですね。

楠見 だから、京料理はぜひとも伏見のお酒で召し上がっていただきたい。

辻 京都市は、清酒による乾杯を奨励する条例を日本で初めて制定しました。行政も京料理には地元の日本酒を併せていただくことを後押ししています。

■対談

◆京都には琵琶湖に匹敵する地下ダムがある

**辻** そもそも京都はどうして地下水が豊富なのですか？  
**楠見** 京都盆地の基盤は全体に古生層といわれる硬く水を通しにくい地層できていて、それが地下で巨大なお椀状の岩盤を形成しています。お椀の一番深いところは昔巨椀池があった場所で、地下800メートルぐらいになります。京都盆地には、桂川、宇治川、木津川の3河川が流入して、天王山—男山で3川が合流して、淀川となります。例えば琵琶湖に降った雨は、必ず宇治川から流出して京都盆地に達します。このように3川の流域に降った雨の一部は必ず京都盆地を流下し、その間に地下に浸透する水もあります。また、京都盆地からの水の出口は、この淀川一つしかありません。このような地形は京都の地下に天然の地下ダムがあるようなもの。そこに貯められている水の量は琵琶湖の水量に匹敵すると、シミュレーション等を実施して推定しました。

◆本物の和食が世界を魅了する

**楠見** 例えばパリには今、日本食レストランが約1500件もあるそうです。でも、中には日本食とは言えない料理を出している店もあります。日本食を海外で発信する時には「これが日本食だ」というものをきちんと打ち出していく必要があるのではないのでしょうか。  
**辻** 私が若い頃は外国のお客様がいらっしやると、洋風にするわけではありませんが、海外の方の舌に受け入れやすいようにどう調理すればいいかと考えたりもしました。しかし、外国の方も以前に比べれば本物の日本の味を楽しみたいと歩み寄ってこられる方が増えてきました。外国の方だからと余計な意識をせず、ありのままの私達の味をお出ししてもよいのではと思うようになりました。

京都の料理人は、世界に向けて日本料理の魅力を発信する地道な活動を長年続けてきました。もう30年近く前になりますが、料理人6人でフランスへ行き、メディア関係者やフランスの一流料理人を招いて本格的な日本料理を作りました。日本の食材、器も包丁も持って行けるものは全部持って。事前に現地の水を使ったらどうなるかと試したら、出汁が全然取れなかったの、水も鴨川の源流の水をポリタンクにくんで持参しました。そのころのフランスにおける日本食のイメージと言えば、訳が分からない島国の料理といったものだったのではないのでしょうか。そのような先入観もあったであろう中で、私を含めてまだ若い料理人達が生きのまま持って行った鱧の骨切りを見せたり、焙烙に笹の葉を敷き炭の煙で燻す宝楽焼きなどを披露しました。ゲストの皆さんは興味津々で包丁の使い方や調理法をご覧になり、出来上がった料理を堪能され、我々は絶賛を浴びたということがありました。

◆国際的な人材を育成し海外へ正しく発信

**楠見** それはすごいですね。そのような挑戦は日本料理の素晴らしさを実感してもらい機会となるだけでなく、若き料理人達の精進にもつながりますね。

最近では海外に出ていかない内向きの若者が増えているのですが、本学では多彩な留学プログラムを用意している他、国際教育センターを設置し、外国人留学生と海外留学を目指す学生のために、日本語・日本文化教育プログラム、海外留学のための事前・事後教育を実施しています。

大学でも料理界でも、グローバル化に対応した人材育成と国際交流を深めることが今求められていると思います。

**辻** 京料理に関して言えば、昨年末には特区として京都市内に限り、「調理の技能があり、帰国後に日本料理を世界に発信する意思を有する」外国人が働きながら学ぶために、2年間はビザの要件を緩和しようという特例措置が国から認定されました。プロの料理人が2年修行すれば、基礎を覚えることはできます。この特例措置を利用して、和食を海外へ正しく発信できる人材の育成につながればと思っています。

◆大学の研究と料理人の知恵で食の進化を

**楠見** 逆に日本の料理人がフランス料理やイタリア料理のプロになるために現地の料理学校に学びに行く例も多いですね。  
**辻** 本場で学び、帰国してフランスやイタリア料理の専門店を開く方もいれば、海外で学んだ調理法を日本料理に活かす方もいます。海外の技術をまねて、その国風もどきの料理を作るのは好ましくありませんが、日本料理の伝統に無いからと新しい調

理法を拒否する必要もありません。フランスから始まった真空調理法など、世界の料理から学べる新しい調理法はたくさんあります。まずは何でも幅広く受け入れて、自分なりに勉強した上で使えるもの、使えないものを選別して取り入れていけば良いのではないのでしょうか。料理も時代とともに進化します。昔のものを捨てるわけではありません。先人たちが築いてきた料理の基本をベースに発展させていけば良いと私は考えています。

**楠見** 日本料理の発展には大学もお役に立てることがあると思っています。農学、栄養学、食品工学は料理と関係の深い学問です。最近ならバイオ関連や環境学もあるでしょう。食文化を語る上では歴史学や芸術学も欠かせません。

**辻** そうですね。実際に今も京都大学と京料理の職人が協力してうまみの研究を進める動きがあるなど、大学と京都の料理界での連携の話が進んでいます。

出汁を取る時は沸騰する前に昆布をあげて、カツオをたっぷり入れ、火を止めて、沈むまで待って漉すといったコツを、私達は若い時から経験で覚えました。今では、昆布は67℃から70℃の間で最もうまみ成分が出ることが分かってきました。こうした科学的な分析で裏付けを得ることは、大学などの力を借りないとできません。先人の知恵は本当にすごいものです。まだまだ、研究すれば合理性が科学的に証明される食生活の知恵はたくさんあると思います。

**楠見** そういう体験から出てきた知恵や習慣を研究テーマとして挙げるのも大学の一つの使命だと思います。また他にも、大学が料理界の方々と接点を持ち、共同でできることはいろいろな面であるだろうと考えています。

例えば、今日お持ちしたミネラルウォーター「自然の秀麗」は、関西大学と伏見にある月桂冠株式会社との共同で開発しました。これは、月桂冠株式会社で実際に仕込水に使っている水から作っています。大学として地下水を守り、環境を守ろうというメッセージを発信するという意図もあって企画したものです。

和食文化はあらゆる領域にまたがるもので、専門の枠を越えて研究者と料理関係者が互いに学び合うことができると思っています。

辻 雅光(つじ まさみつ)

1951年京都生まれ。74年立命館大学経営学部卒業。大学卒業後、東京の料亭で修行。78年中村楼に戻り、家業に従事。故井口海仙氏に茶を学ぶ。83年12代目中村楼主人を継ぎ、現在に至る。京都料理芽生会理事。著書に「中村楼の茶懐石」、共著「科学主人がつくる京のおそうざい」、共著「懐石料理」がある。

楠見 晴重(くすみ はるしげ)

1953年大阪府生まれ。78年関西大学工学部土木工学科卒業。81年同大学大学院工学研究科博士課程後期課程中途退学。82年関西大学工学部助手。90～91年英国Imperial College留学。関西大学専任講師、助教授を経て、2002年教授。07年環境都市工学部教授となり、同年4月から学部長に。09年関西大学学長に就任。公益財団法人大学基準協会理事、一般社団法人日本私立大学連盟常務理事、国土交通省道路防災ドクター、土木学会フェロー会員。主な共編著書に「地圏環境情報学 地下を診る最先端技術」「アジア古都物語 京都一千年の水脈—」など。



料理も時代とともに進化します。昔のものを捨てるわけではありません。先人たちが築いてきた料理の基本をベースに発展させていけば良いと私は考えています。

和食文化はあらゆる領域にまたがるもので、専門の枠を越えて研究者と料理関係者が互いに学び合うことができると思っています。

## コピーを手掛けたCMが 民放連盟賞最優秀賞

### 関西大学の特色を等身大に表現

◎社会学部3年次生  
前田 奈美 さん

日本民間放送連盟賞は、年1回、全国の民放各社からのエンターを対象に優秀な番組・CM、業績を顕彰する権威ある賞。2013年秋に行われた表彰式では受賞者の1人として社会学部マス・コミュニケーション学専攻<sup>(\*)</sup>3年次生の前田奈美さんの姿があった。彼女が関西大学を紹介するコピーを手掛け、FM大阪が制作したCMがラジオCM第1種最優秀賞に選出されたのだ。<sup>\*</sup>2013年度入学生よりメディア専攻に改称



▲日本民間放送連盟賞の受賞トロフィーを持つ前田さん

前田 奈美—まへだ なみ  
■1993(平成5)年、大阪府生まれ。大阪府立阪南高校卒業。社会学部3年次生。手掛けたコピーをもとにFM大阪が制作したCM「関西大学篇」が、平成25年日本民間放送連盟賞ラジオCM第1種(20秒以内)部門最優秀賞を受賞。中高生時代から読書感想文で羽曳野市代表になるなど高い文章力を発揮。好きな作家は重松清。

「関大出身の社員がいる」と始まる今回のCMは、フィギュアスケート選手、小説家、警察官、お笑い芸人、肝っ玉母さん、国会議員と、関西大学で学ぶことで広がる可能性をテンポよく表現し、最後は「さあ、関西大学で何しよう」という問いかけで締められている。大学の広告にありがちな学術的先進性や教育効果などを並べるのではなく、学生の等身大目線の表現が好印象を与え、日本民間放送連盟賞ラジオCM第1種最優秀賞受賞につながった。

ジャーナリズム実習の授業で、「自分の学校の広告を考えてください」という全国FM放送協議会主催のJFN学生ラジオCMコンテストの募集を知ったのが、受賞までの道のりの始まりだった。関くものがあつた彼女は帰りの電車の中で早速、コピーをまとめ、降車するまでの間にスマホから送信するという驚きの早技で応募した。

コピーは見事大阪代表に選ばれ、FM大阪のスタジオで収録が行われた。第一線のディレクターが演出し、ナレーターには美声で名高い畑中ふう氏が起用された。自分の書いたものが人気ナレーターの声で作品に仕上がっていく瞬間に立ち会って、鳥肌がたった。ただし、「もう少し落ち着いた調子で」と臆することなく注文を付けることも忘れなかった。学生ラジオCMコンテストでは入賞できなかったが、コピーの良さを疑わなかったFM大阪の担当者が民間放送連盟賞に推薦し受賞へと導いた。

中学の頃には、既に広告好き。誰にも頼まれないのに、自分の中でコピーを考えたりしていた。広告について勉強しようと

# LEADERS NOW!

決心したのは、大成建設の広告の「地図に残る仕事。」というコピー。「たったの一行の活字なのに、働く人の姿やその家族との風景や、いろいろな映像が浮かんで来て、言葉の力ってすごいって思ったんです」。言葉と伝えることへの関心を深めた前田さんが、本学の社会学部マス・コミュニケーション学専攻を選んだのも自然なことだった。

入学後、2年次には地域活性化をテーマに活動する学生団体の吹田クリエイティブムーブメントに1年間参加した。そこでの出会いが、多様な個性が共存する関西大学の印象を彼女の中で強くした。

「日頃から本当にさまざまな人がいる大学だと思っていました。その実感をコピーで表現することを第一に考えました。関大は本人がやろうと思えば、個性を自由に発揮し、自分を見つめられる場所だと思います。今は言葉を使う仕事に就きたいと思っています。自分がいいと感じた物を、自分なりの表現で伝えることができた時が私にとってはうれしい瞬間なんです」

4月からは最終学年。「さあ、関西大学で何しよう」という問いに対する答えは彼女の中ではもうはっきりしている。ぶれない希望を胸に抱いて、前田さんの挑戦は始まったばかりだ。

受賞CMは、[http://www.kansai-u.ac.jp/mt/archives/pdf/130925\\_n\\_KansaiUniv.mp3](http://www.kansai-u.ac.jp/mt/archives/pdf/130925_n_KansaiUniv.mp3)で聴くことができる。



関大出身の社員がいる。  
関大出身のフィギュアスケート選手がいる。  
関大出身の警察官がいて、お笑い芸人がある。  
関大出身の肝っ玉母さんがいれば、国会議員もいて、  
そして関大出身の、あなたになる。  
さあ、関西大学で何しよう。

## お参りは自分と向き合い 感謝を報告する心の時間

### 京都・清水寺の次世代を担う僧侶

◎清水寺僧侶  
大西 英玄 さん —社会学部 2001年卒業—

『源氏物語』『枕草子』にも登場し、平安時代から常に多くの参拝者を迎えてきた京都・音羽山の清水寺。2001年に関西大学社会学部を卒業した大西英玄さんは、誰もが知るこの古寺の執事補を務める僧侶だ。



沈む夕日に極楽浄土を想う日想観を行う西門で

清水寺の中にある成徳院で生まれ育ち、小学校5年生で得度した。祖父は名僧とうたわれた大西良慶さん。良慶和上は貫主を務めていたときに清水寺を本山として北法相宗を設立した。そのような特別な環境に育った大西英玄さんだが、関西大学での彼のキャンパスライフはごく普通のものだった。

寺を出て、吹田市内に一人暮らし。髪を無造作に伸ばし、当時の社会学部産業心理学(現 心理学)専攻で広告を学び、将来は広告代理店で働くことをイメージしたこともあった。スキーサークルに所属し冬は八方尾根で滑った。大阪・梅田の東通商店街のカラオケ店で3年以上アルバイトも経験した。僧侶として生きることをまだ決めていたわけではなかったが、卒業が近づくにつれ、寺に戻る方へと心は傾いていた。

「私がここに生まれたことにも何か意味がある、受け入れればよいと教えてくださる方がいました。僧侶が多くの人の幸せに役立つ、一生をかける重みのある仕事だと感じるようになりました。あの時、この道を選んで意味があったのだと行く行く思えるように生きる、その途上に私は今いるのだと思っています」

卒業後、アメリカに2年間留学。帰国後、高野山での修行を経て、清水寺に入った。

清水寺の僧侶の毎日は多忙だ。僧侶は8人しかいないため、



清水寺 スペシャルサイト  
<http://feel.kiyomizudera.or.jp>



分担して寺の業務にあたる。年中行事、月例の行事、仏事はもちろん、森清範貫主の法話行脚に随行することもあれば、仏教会をはじめ諸団体の会議や催しも多い。世界宗教者平和会議など海外へ出向く機会もある。また、大西さん自身が法話や原稿や書をしたためることも多い。また、参拝者の案内も大切な務めだ。

大西 英玄—おおにし えいげん  
■1978(昭和53)年、京都府・清水寺成徳院に生まれる。1996年平安高校(現龍谷大平安高校)、2001年関西大学社会学部を卒業後、米国留学、高野山で加行。2004年より清水寺録事を務め、2013年より執事補。祖父は元貫主の故・大西良慶和上。

「大小併せて、ご案内する団体は年間100組はゆうに超えます。どんな著名な方が来られても、どこの国の方が来られても同じ心持ちでお迎えます。短い時間の中で、心を通わせて、私を通じてこの寺に親しみを感じていただきたい。修学旅行生、外国の方々、レンタル着物の女性グループ、西国巡礼の方などさまざまな方々の小さなご縁がこの境内で育まれるというのが、清水寺の有りようだと思います」

大西さんを含め、30代の若手僧侶が4人いる。彼らは力を合わせてこれからの清水寺を担っていこうとしている。

「清水寺は1200年間ずっと庶民に支えられてきました。特定の誰かのためではなく皆の心の拠り所であることが清水寺の特徴です。訪れていただいて景観を楽しんでもらうだけでもいい、空気を感じてもらうだけでもいいのです。それが信仰の入口となって、何度か足を運ぶうちに感じ方が違ってくるかもしれない。仏に向き合うことは、自分自身に向き合うことと同じです。忙しい毎日の中では、自分自身に向き合う時間も無いでしょう。お寺は自分が今この場にいるために、どれだけの支えがあったおかげなのかを振り返る場になります。お参りすることは、願い事をするのではなく、『今日、元気にこうやって清水寺に来ているのは、何々のおかげです』と“ありがとう”を報告する機会だと思うのです」

そういう心の時間を持つ人が少しでも増えてほしいと、大西さんの発案で2013年10月に新しく清水寺のウェブサイト(スペシャルサイト) <http://feel.kiyomizudera.or.jp> を開設するなど、新たな試みを始めた。「伝統は革新の連続」という言葉を伺ったことがあります。今の清水寺を見せられるのは今の私達にしかできない。次に引き継がれるまでのほんの一役ですが、この一つ一つの革新が伝統をつないでいくことになるのだと思います」



■研究最前線

コミュニケーションメディアの研究

# 新しいコミュニケーション表現システム

寄り添ってサポートする安心ロボット

●総合情報学部  
米澤 朋子 准教授

ぬいぐるみ、沖縄の楽器・三線、分解しかけの電子製品、ハンダ付け用の工具。高槻キャンパスにある米澤朋子准教授の研究室は、自由な発想を反映するかのように雑多な物で溢れている。米澤准教授は独自のアイデアで、音、映像、ロボットなどを用いて、豊かなコミュニケーションの形を創り出そうとしている。



三線弾き語り。琉球民謡の画面インタフェースも研究

## 腕に可愛いロボットを連れて出かけよう

—可愛いぬいぐるみのロボットがありますね。

これは最近の研究の一つで、腕に抱き付く形の寄り添い型ウェアラブルロボットです。振動モーターや圧力アクチュエータを中に入れてあり、装着している人の腕を叩いたり、きゅっと抱き付くなど、ぬいぐるみからのスキンシップ表現を通じて、さまざまなメッセージの伝達ができるようにしています。撫でると



可愛いぬいぐるみの外見をした寄り添い型ウェアラブルロボット。内部に入れた振動モーター、圧力アクチュエータによって装着者へスキンシップ表現をする



▲ハンダ付けは好きな作業

反応するといったロボットはこれまでも数多くあるのですが、スキンシップを自分からしてくれるものはなかったと思います。

—どのような場面でこのロボットを使うのですか？

昨今、高齢化や核家族化の影響で、一人暮らしの高齢者が増加しています。この中には、要介助の高齢者や、一人での外出に不安のある高齢者もいるでしょう。例えば、外出時の高齢者に「トイレに行く時間です」と知らせるのに、大きな音声で伝えたら恥ずかしいでしょうし、携帯電話にメールを送ってバイブレータで分かるようにしても、取り出して確認するのが煩わしいですね。しかし、このロボットとのスキンシップを通じて優しく伝えれば、あたかも介助者がそばにいるようなサポートを感じられて心強い便利でしょう。

周囲の危険に気が付かない場合でも、腕を強く握られたらドキッと反応しますよね。視覚情報よりも触覚情報の方が注意誘導力が高い場合があり、直感的に伝える手段としてスキンシップを利用することは効果的だと考えています。

—外見はぬいぐるみでなくても良いのでは？

ある情報を伝える際に、ロボットが擬人化されていると、分かりにくい情報でも相手に受け入れられやすいということが、これまでの研究で明らかになっています。ですから、少なくとも頭部と顔があり、手が動くぐらいはできるロボットを作らないといけないと考えています。

情報をいかに分かりやすく伝えるか、そのためのさまざまな表現方法を考えることが私の研究で、身の回りにある不自由やコミュニケーションの不具合などの問題に着目し、解決につながる新しいコミュニケーション表現システムの創造を目指しています。ロボットも、よりスムーズにコミュニケーションをとるための一つのメディア(媒体)としてとらえています。

# COMMUNICATION

## コミュニケーションを豊かにする、さまざまなインタラクティブシステム

—他にも新しいコミュニケーションのメディアやシステムを研究してこられたんですね。

例えば、ロボットの眼球の移動と頭部の動きで人の視線を誘導するという研究を以前していたのですが、そういった視線のやりとりを、今度はディスプレイに表示される3DCGの仮想エージェントで行って、実空間の存在ではない擬人化エージェントとユーザーがもっとコミュニケーションできるようにする実験を学生と進めています。

また、音が並行的に聞こえる音響空間では、どのようなコミュニケーションができるかという研究を文部科学省の科学研究費助成事業若手研究Aに採択されて行っています。この研究では、例えば、多くの学生を相手に話す授業で、理解できていない学生がいれば、そのことを知らせる音が教員に通知され、教員は話を続けながら、超指向性スピーカーを仕込んだロボットを使って、理解できていない学生だけに向かって補足する情報を音声で送るといったことを考えています。

音の表現に関する研究は以前から行っていて、大学院修了後に就職した日本電信電話株式会社(NIT)のサイバースペース研究所では、音声合成の研究開発に従事して、最低限これだけの声を採取すれば、その人の声を合成できるというシステムを作ったり、怒ったり、笑ったり、ささやいたり、人工の歌声に表情を付ける研究をしました。

また、ホワイトボードにメモを貼り付けるように、音声と自分の頭が向いている方向の情報だけで、音声メモの付箋を周囲の仮想空間に貼り付けて保存したり、聞くことができるシステムも開発しました。この研究で、2008年に独立行政法人情報処理推進機構の未踏事業でスーパークリエイターに選ばれました。

他にも、人と同じように発声する際に息遣いをするぬいぐるみロボットや、生命の有限性(寿命)と遺伝を持ったペットロボットの研究もしています。

## 擬人化を体系化する理論にも取り組みたい

—ユニークな研究ばかりですね。その発想はどこからくるのでしょうか？

高校生の時に、「アクアゾーン」という観賞魚飼育シミュレーションソフトに出会い、人工的な生き物に対して思い入れができることに感動して、こういうものを作る人になりたいと思ったのが現在の研究の原点になっていると思います。

一見、乖離している物事の間でも、「これとこれはつながっている」とか「こうすれば、こういう新しいものになる」といつもアイデアを探していて、その思い付きをすぐに口にしたりするので、人から私は「話が飛ぶ」とよく言われます。周りの研究者や学生には「ときどきおかしな思い付きを研究に持ち込むから、私の言うことは受け流したりして、しばらく様子を見た方がいい」と伝えています。

どうしてそのような発想が出てくるかと言えば、何か起こる

たびに些細なことでも「なぜ?何?」と子供のように考えているからかもしれません。

—研究は楽しいですか？

思い付いたことを形にする便利なツールが、今はたくさんあります。しかし、いくら便利になったといっても、すぐ形にできるわけではありません。どうやったら実現できるのかを懸命に考え、実現した後でこうやればもっとよかったと分析する、その手間と苦心は大変ですが楽しい。研究の中には、そういった楽しみがすべて詰まっています。また、最近は擬人化の技術や現象を体系化する理論を考えることも楽しくなってきました。やっと私も少しは、学術的なことも考えられるようになったかなと思ったりしています。

—今後の抱負をお聞かせください。

世の中の役に立ち、長く使われる物を作りたい。そんな視点もあったのかと驚かれるような、誰も考えていなかったことを提案し続けていきたい。さまざまなプロジェクトでの交流を通じて、世の中には面白い人がたくさんいるんだと感じています。これからも面白い人が集まる中で、物づくりができればと思っています。学生と私では世代的な背景が違うので、メール一つをとっても異なる感性を持っていることが面白く刺激になります。コミュニケーションの形が違う人が研究の世界にどんどん入ってきて、一緒に研究できることをとても楽しみにしています。



研究最前線

アメリカ近代建築の研究

# R. シンドラーの建築思想と空間構成

現代建築に与えた意義を探る

●環境都市工学部 建築学科  
末包 伸吾 教授

ウィーンに生まれ、アメリカに渡り、ロサンゼルスを中心に1920年代から50年代に活躍した建築家、ルドルフ・シンドラーは、今、建築史上の重要な人物として新たな脚光を浴びている。阪神間の住宅を中心に建築家としても活躍する末包伸吾教授は、現代建築への多くのヒントを含むシンドラーの思想と作品に早くから着目し、シンドラー建築を丹念に検証する研究で世界のシンドラー研究をリードしてきた。



## 地域性を取り入れたシンドラーの手法

—末包先生はルドルフ・シンドラー研究の第一人者と伺っています。シンドラーはどのような建築家ですか？

1900年代初めから1960年代半ばぐらいまでを近代建築の時代と呼びます。この時代は工業化社会を背景にガラス張りの四角い豆腐のような建築が一つの理想とされ、それが世界中に広がりました。その結果、その土地で暮らす人々が大事にしてきた文化がどんどん失われ、どこの駅で降りても、同じ風景しか見られなくなってしまいました。

私が研究しているルドルフ・シンドラーという建築家は、近代建築の時代の真っ直中にいながら、同時に近代批判をしていた人物です。極めて近代的でありながら、気候条件といった地域性を非常に大事にした建築を作りました。

そしてもう一つ、シンドラーは「空間」という言葉を建築の世界で最初に使って、空間が建築で一番大事だと言い出した人物でもあります。

近代における近代批判と、空間という概念の提唱という2つの側面を彼を捉え、その作品と思想を理論的に研究することは、現代の建築に対するヒントになるだろうと思っています。

—シンドラーが設計した住宅には彼の批評性や思想が表れているのですか？

シンドラーは1922年にロサンゼルスに自邸を建てました。それまでのカリフォルニアの建築の流行はスパニッシュ・コロニアルといって、分厚い壁で屋外の自然から室内を守るという建築でした。しかし、シンドラーは雨の少ない温和な気候を生かし、パティオに面した部分には完全に取り外すこともできる引き戸を採用し、室内の床と屋外のレベルを合わせて、内部と外部の差異を無くしました。暖炉も屋外に設置し、夜は外で寝ましょうと寝室の代わりに「スリーピング・ポーチ」を屋外に設け、機械的な暖房施設も取り入れませんでした。



このように近代的な機械にも電気にも頼らない自然の中に身を置く空間を作り出した一方で、彼はコンクリートという住宅向けには大変新しい素材を採用しました。

近代の恩恵も享受するけれど、同時に地域の文化の核を忘れない、その両方を兼ね備えようというのがシンドラーの近代批判の一つの主張であり、彼は自邸をはじめ、空間というものを媒介にして、地域性を取り入れたさまざまな趣向を凝らした建築を生涯にわたり作っていきました。

—シンドラーの建築は当時どのように受け取られたのでしょうか？

当時は、あまり高い評価を得られませんでした。シンドラーは空間を追求し、建築スタイルを変え続けたことも理解されなかった理由の一つと考えられます。

▼末包教授の著書(左から)

- 「ルドルフ・シンドラー—カリフォルニアのモダンリビング」デヴィッド・グールド(著)末包伸吾(訳) / 鹿島出版会(1999)
- 「テキスト建築の20世紀」末包伸吾・本田昌昭(編著)岩田章吾・加嶋章博・朽木順綱・小林正子・中江 研(著) / 学芸出版社(2009)
- 「テキスト建築意匠」末包伸吾・平尾和洋(編著)大塚健之・藤木庸介・松本 裕・山本直彦(著) / 学芸出版社(2006)



## SUEKANE Works

(左から)

- 「b-in-d」SDレビュー 2000入選  
コの字型の構造で全体の構成を作り出した個人住宅 (鉄骨造・2001年竣工)
- 「M邸」日本建築家協会優秀建築選 2006  
3枚の傾いた壁で全体の構成を作り出した個人住宅 (鉄筋コンクリート造・2005年竣工)



しかし、今、世界的にロサンゼルス近代建築に注目が集まっていて、その源流としてシンドラーは捉えられています。そういう点で、影響を受けている現代の建築家は増えていると思います。

—どのような方法でシンドラーについて研究されたのですか？

シンドラーは生涯に110ぐらい住宅を作っているのですが、まずはその図面をすべて自分で一から作り直しました。

カリフォルニア大学サンタバーバラ校に、世界的に有名な建築図面コレクションがあって、シンドラーのものはすべてそこに残っているのですが、原図といわれるもので読み取るのは一苦労。1つの建築で40~50枚の原図が通常ありますから、4000枚以上を数週間泊りがけで通い詰め、朝から晩まで1枚ずつ見ていきました。そうして図面を自分で描いていくと、彼が人間の身体性を重視した寸法を採用するなど、自分の中で一定のルールを決めて設計していたことが徐々に分かってきました。その研究で論文を書き、今は雑誌などに寄稿した文章を分析し、彼の残した言葉を研究している最中です。

## 阪神間を舞台に計画・設計を实践

—末包先生は建築家としてもご活躍されていますが、どのような仕事をされているのですか？

阪神間の西宮市、芦屋市などを中心に、個人住宅をメインにこれまでに十数軒の建築を手がけています。2000年に若手建築家の登竜門といわれる「SDレビュー」入選、2006年に「日本建築家協会優秀建築選」に選ばれるなど、何度か入選・受賞することもできました。

—住宅を設計するとき大切にしていることはありますか？

一番考えるのは、やはり施主の夢をいかにバランスよく実現するかということです。その上で、さらに施主を驚かせるプ

レゼントをしてあげたいという思いで設計しています。住む方が楽しい毎日過ごし、毎日何か発見があるような住宅を作りたい。そのためには、地域を深く読み込んでいかなければ発見を提供できません。今は特に「阪神間モダニズム」をテーマの一つに掲げながら設計しています。ある住宅では、海が見え、山が見え、傾斜地を歩く阪神間の特徴的な体験を家の中に凝縮して織り込んだ設計をしました。

## 建築はすべてが人の生活に関わる

—今後の抱負をお聞かせください。

私は5年ごとの計画を立ててここまでやってきました。大学から社会に出たのが、25歳。30歳までは社会人の基礎を固め、建築の実務を知ろうと、建設会社の設計部で働き、一級建築士の資格も取得し、結婚もしました。次の5年間は、大学に戻って研究者としての基礎固めをしました。35歳からは建築家としての活動も始め、40代前半はその発展期。45歳で本学に来て、現在50歳です。この先の5年はシンドラーの研究をもう一段階深めて、私自身の設計との関係を問いたいと考えています。シンドラーは私にとっていまだに大きな謎です。その謎をもう少し解き明かせればと思っています。その次の5年は私自身の建築思想を追究したい。結局、まだまだ建築のことを知りたいのです。

—建築の面白さとはどのようなところでしょうか？

数学が得意な人も歴史好きな人も、文系系系を問わず誰もが何かしら自分に合うことを見つけられるのが建築です。建築はすべてが人の生活に関わってくることで、そこがやはり面白い。家族は私のことを「建築オタク」と呼んであきれいています。どこへ行っても、「この空間は気持ちいいか」と考え、テレビを見ても「あの建物、誰の設計だろうか?」と思い、頭から建築が離れることがありません。



町田樹さん



高橋大輔さん

第22回オリンピック冬季競技大会

# 最後まで 戦い抜いた

## ソチ五輪・フィギュアスケート男子シングルで 町田樹さんが5位、高橋大輔さんが6位に入賞!

日本時間で2月14・15日に行われたフィギュアスケート男子シングルで、体育会アイススケート部の町田樹さん(文4)が5位、高橋大輔さん(文学研究科M2)が6位入賞の成績を取めた。

15日のフリー、高橋さんはショートプログラム(SP)4位から挑んだ。冒頭の4回転ジャンプは両足着氷となったものの、その後は伸びやかな滑りを見せ、世界一と称される華麗なステップを披露。笑顔を見せながら、攻めの姿勢で演技切った。

高橋さんは、2006年トリノ五輪で8位入賞、2010年バンクーバー五輪では日本男子初の銅メダルを獲得。今回で、日本フィギュアスケート史上初の快挙となる3大会連続出場を果たした。日本フィギュア界を長くリードし、集大成として迎えたソチ。スケート人生への感謝の気持ちが伝わってくる演技だった。

一方、五輪初出場となる町田さんは、SP11位からフリーでの巻き返しを狙った。団体フリーに続き、「ソチの空に天高く舞い上がりたい」との想いを込めて『火の鳥』を熱演。完璧な踏み切りと姿勢で跳んだ冒頭の4回転ジャンプでまさかの転倒があったが、次の4回転は見事に成功。ジャンプやスピンのなどで、力

強く躍動感あふれる演技を貫いた。

高橋さん、町田さんの五輪出場に先立ち、1月8日には、千里山キャンパスで壮行会が開催された。楠見晴重学長をはじめ、学生や教職員ら約1000人が参加し、世界で戦うアスリートに大きな声援を送った。

また、フリー当日には、千里山キャンパスで応援会が行われ、チアスティックや国旗を手にした約350人もの学生や教職員らが「オール関大応援団」として巨大スクリーン前に集結。ジャンプが決まるたびに「やったあ!」「よしっ!」と歓声を上げ、ソチへ向けて大きな拍手と熱いエールを送った。



壮行会での町田さん(左)と高橋さん 熱い声援を送る関大応援団

### ◎ 文部科学省ミュージアム「情報ひろば」で、企画展示を開催

## 古代エジプトの文化財の修復と研究 ～異文化理解と文理融合型の複合的・総合的研究の取り組み～

2013年12月から2014年3月まで、文部科学省ミュージアム「情報ひろば」(東京都千代田区)において、「古代エジプトの文化財の修復と研究」をテーマとする関西大学の企画展示が開催されている。

関西大学は、文学部の吹田浩教授を中心に、世界遺産に登録されている古代エジプト時代最大の墓域サッカラにある王女の墓「イドゥートのマスタバ墓」の調査を続けている。同墓は、エジプト最古の代表的な墓の一つ。特に地下埋葬室の壁画が美しいとして名高いが、4300年もの経年劣化により危機的な状況にあるため、日本の文化財科学の技術を活用すると共に、地盤工学や建築工学、抗菌抗微生物学、化学分析などの技術を結合した保全活動に取り組んできた。

今回の企画展示は、文化財の劣化過程やその原因を解明し、どのような対策をとるべきかという視点から、科学的見地と国際感覚を養うことが目的。イドゥートのマスタバ墓やサッカラ遺跡の概要や壁画修復過程を3D映像などで紹介している他、4300年前と同じ技法で復元した古代壁画のレプリカの展示や、エジプト学を中心とした異文化理解と共に、さまざまな技術を結び付けた文理融合型の研究活動のパネル展示を行っている。



1. 古代エジプトの文化財保護を行う研究活動をパネルで紹介  
2. 地下埋葬室の壁画の復元レプリカ  
3. モニターでは遺跡の概要や壁画修復過程の3D映像を紹介



#### ▼ 関西大学【世界最古の壁画救出までの歩み】

- 2003年—「日本・エジプト合同マスタバ・イドゥート調査ミッション」として文化財保存修復の研究をスタート。
- 2008年—文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択され、関西大学文化財保存修復研究拠点(ICP)を設立。
- 2013年—文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択され、関西大学国際文化財・文化研究センター(CHC)を設立。日本・エジプト・ポーランドの合同研究で古代エジプトの文化財における修復技術の開発を推進中。

### ●2014年4月、大学院人間健康研究科を開設 健康運動や体育スポーツの指導者、 地域福祉の実践者を育成

2014年4月、関西大学は新たに人間健康研究科を開設する。人間健康学部が2010年に大阪府堺市に誕生して以来、堺市民と健康で豊かな生活を共有するために、さまざまな支援・連

携事業を展開し、積極的な地域貢献活動を行ってきた。

研究科設置は、人間健康学部の実績を踏まえ、地域貢献型の性格を継承しつつ、より高度な研究教育を行うことが目的。高度専門職としての健康運動や体育・スポーツの指導者、地域福祉の実践者の育成、あるいは学際的かつ実践的視野を持った研究者の育成を通じて、現代社会が直面する課題に取り組み、解決へと導くことを目指す。また、堺市からは、専門性の高い人材の育成による地域発展と活性化への貢献に期待が寄せられている。

◎ 関西大学・八幡市・URが連携協定を締結

## 男山団地再生に向け、学生が運営 コミュニティ活動拠点「だんだんテラス」を開設



関西大学と京都府八幡市、同市にある「男山団地」を所有・管理するUR都市機構は10月25日、「男山地域まちづくり連携協定」を締結した。これは、高度経済成長期に発展し、急速に老朽化や住民の高齢化が進む男山団地と周辺地域の活性化を図るもので、行政、大学、事業者が連携して再生を目指す。全国でも珍しい取り組みとして期待が寄せられている。その拠点として、11月16日、男山団地中央センターに「だんだんテラス」を開設した。

▲写真：(左から)山田啓二京都府知事、大西誠 UR都市機構西日本支社社長、楠見晴重学長、堀口文昭八幡市長

石清水八幡宮の南側に広がる男山地域には、1960年代から開発が進められた集合住宅150棟以上が並び、周辺の戸建て住宅等も含めると約2万1000人が暮らしている。しかし、ピーク時よりも約8000人減少しているうえ、市の平均より高齢化も進んでいる。

関西大学は2012年4月よりKSDP団地再編プロジェクトの取り組みとして、男山団地再編と地域の活性化を目指し、学生が団地に滞在して住民ニーズのくみ上げ等を行ってきた。その中の「皆で集える場所が欲しい」という声に応え、11月16日、商店街内の空き店舗を活用して、学生が運営する交流スペース「だんだんテラス」をオープンした。

だんだんテラスとは、“団地の将来を談じる場”という意味が込められており、広さは約45平方メートル。学生と住民が車座になって話し合える板の間等が設けられ、通りからも中が見えやすいよう、透明なガラスの引き戸が用いられている。ここに学生は常駐し、年中無休を目指す。

オープン当日は「だんだんテラス オープニング大作戦」と称した地域交流イベントを開催。市内農家の野菜販売や、団地の今昔が分かる写真の展示、灯るうづくりのワークショップ等が行われ、お年寄りから子供まで、多くの地域住民でにぎわった。



学生がデザインした売り場で、市内農家の野菜を販売した「だんだん市場」



▲(写真・上)「だんだんテラス」に設けられた板の間。学生と住民が車座になって話したり、ワークショップなどが行われる。  
▲(写真・下)多くの地域住民が訪れたオープン当日

● **KSDP団地再編プロジェクト** (関西大学先端科学技術推進機構地域再生センター「集合住宅「団地」の再編(再生・更新)手法に関する技術開発研究」プロジェクト) 概要

文部科学省平成23年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択された取り組みで、多くの問題を抱えた大規模公営賃貸集合住宅団地を、住宅等のストックの活用を図りつつ、住民が守り育て、自立的に更新していけるような「まち」に再編することを目指す。また、適切な公・民の事業に適用できる技術を開発し、実践に活かすことを目的として、空間、制度、暮らしの多面的な視点から、団地そのものの再編を検討している。



◎ オーストラリア政府派遣短期日本語・日本文化研修プログラム

## オーストラリアの日本語教師らが日本文化を体験

関西大学は、オーストラリア政府派遣短期日本語・日本文化研修プログラム(ELTF)の実施機関として採択されており、今年は1月2日から22日までの日程で59人の研修生を迎えた。

ELTFとは、オーストラリア政府が実施する外国語教師海外派遣プロジェクトの一つであり、オーストラリア各地で日本語教師として教育に携わっている人や日本語教師を目指している人が、日本で語学や文化を学ぶというプログラム。期間中、研修生は本学にて日本語の授業を受講し、併設校や近隣の小・中・高校を訪問して授業参観を行った。また、京都や神戸の寺社や文化施設を見学したり、大阪・道頓堀で食文化を体験したり、吹田市の成人式にも参加。更に、千里山キャンパスでは、狂言鑑賞の他、風呂敷の包み方やお弁当の作り方など、さまざまな日本文化体験を楽しんだ。



▲1月6日に開催された歓迎会での記念撮影

1. 風呂敷で瓶の包み方を学ぶ研修生たち
2. お弁当作りを体験。あと少しで完成!
3. 修了式で祝辞を述べるキャサリン・テイラー在阪オーストラリア総領事



◎ 大学受験を希望する被災地高校生を関大生がサポート

## 関西大学の研究センターSTEPが 岩手県立大槌高校への遠隔学習支援を開始



▲打ち合わせ中の「KUPIDO」メンバー



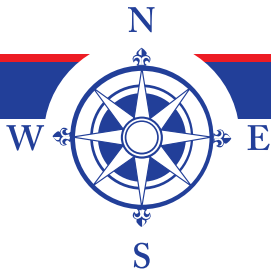
関西大学社会的信頼システム創生センター(STEP)は、2013年10月より、岩手県立大槌高校へのICTを活用した遠隔学習支援に関するプロジェクトを立ち上げ、支援活動を2014年1月から開始した。

関西大学と岩手県大槌町は2012年7月に人材育成・雇用創出による自律的復興支援に関する連携協定を締結しており、STEPが中心となって地元へのさまざまな支援を展開してきた。大槌町は、地域の若者の専門職への就業意欲が高まりを見せる中、震災以前より大槌町の大学進学率は相対的に低く、震災の影響もあり、勉強をする環境は必ずしも十分に整っていないという課題を抱えている。この状況をブレイクスルーするため、関大生が高校生の学習を支援するプロジェクトを稼働することとなった。

実際には、教員を目指す関大生を中心とする教育支援ボランティアサークル「KUPIDO」のメンバーが、社会学部に設置された多地点コミュニケーションシステムを利用し、インターネットを通じて、あたかも対面で話しているように自然な形で高校生の学習を支援している。講義は放課後の週1日、英語の指導から開始しており、初回から4回目までは高校生が本プロジェクトに永続的・積極的に関わり続けてもらうことを目的として、田尻悟郎教授(外国語学部)がキックオフ講義を行った。

◀1.ICTを活用した岩手県立大槌高校への遠隔授業の様子 2.講義を行う田尻悟郎教授





文化会速記部が全日本大学速記競技大会で50連覇を達成



全日本大学速記競技大会で50連覇を成し遂げた文化会速記部

2013年10月20日に開催された全日本大学速記競技大会において、宮武勇馬さん(商3)が主将を務める文化会速記部が50連覇を勝ち取った。この大会は、特殊な文字を使って発言内容を書き取る速記術の早さと正確さを競うもの。今大会は創部60年の節目にあたり、関西大学からは16人が出場。宮武さんは、「50連覇で満足せず、来年からも頑張りたい」と意気込みを語った。

体育会サッカー部の小谷祐喜さん、寺岡真弘さんがJリーグに加入内定



小谷祐喜さん(人4) 寺岡真弘さん(政策4)

体育会サッカー部の小谷祐喜さん(人4)が2014シーズンから、Jリーグセレッソ大阪へ、寺岡真弘さん(政策4)がJリーグギラヴァンツ北九州へ、それぞれ加入が内定した。

小谷さんは、人に対する絶対的な強さを持ち、激しいマークでボールを奪い取る1対1のディフェンスが得意。中学時代にセレッソ大阪のU-15で育ち、関西大学第一高等学校、関西大学体育会サッカー部と、着実に実力をつけてきた選手だ。

寺岡さんは、攻撃の起点となるDFで、気持ちを前面に出したプレーが特徴。両選手の今後の活躍から目が離せない。

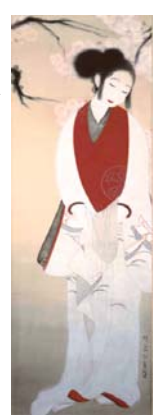
健康づくり関西新拠点が吹田操車場跡地に展開することをテーマにシンポジウムを開催

1984年に役割を終えた吹田操車場の跡地では、現在、国立循環器病研究センターと吹田市民病院の移転を中心に、持続可能で先進的な環境都市モデルとなる新しいまちづくりが進められている。市民の健康づくりの進展や医療産業の発展が期待される中、国立循環器病研究センター・摂津市・独立行政法人都市再生機構の協力を得て、11月30日、吹田市と共催で「医療・健康まちづくりシンポジウム」が千里山キャンパスにて開催された。本学は以前から、吹田市と包括連携協定を締結し、同街区のまちづくりのあるべき姿について、研究や情報交換を行ってきた。当日は、環境都市工学部の秋山孝正教授が「健康まちづくりの基本理念と現実的アプローチ」と題して基調講演を行い、吹田市・摂津市・国立循環器病研究センター関係者及び本学教員らが、「エコとメディカルの融合」、「健康・医療・福祉の連携」、「持続可能性と多様性」について、それぞれの観点から議論を交わした。超高齢化社会・人口減少が進む中、まちのあるべき姿とその実現に向けた課題について、約200人の来場者は熱心に耳を傾けた。



図書館創設100周年・博物館開設20周年を祝して連携企画展「関西大学名品万華鏡—館館選イチオシ!—」を開催

2014年に本学図書館は創設100周年、博物館は開設20周年の節目を迎えることを記念し、連携企画展「関西大学名品万華鏡—館館選イチオシ!—」が千里山キャンパスの博物館特別展示室において開催される。2016年の本学創立130周年記念事業の一環として位置付けられ、図書館からは廣瀬文庫より『萬葉集』、中井藍江画の『楨檜群鹿図』、北野恒富画の『花の夜』など、博物館からは縄文時代の玦状耳飾や古墳時代の石枕といった重要文化財をはじめ、古墳時代の鋳形石など、両館所蔵の貴重な名品が約110点展示される。



北野恒富「花の夜」

【期 間】4月1日(火)~5月18日(日)  
 日曜・祝日休館(4月6日・5月18日は開館)  
 【開館時間】午前10時~午後4時  
 【入 館 料】無料



「石枕」(重要文化財)

同期間、総合図書館展示室では、「関西大学図書館100年のあゆみ展」を開催する。